

吉沢先生と私

佐伯梅友

私が吉沢先生のお名前を知ったのは、大正十二年であったろうか。国文法の著者としてだけのことで、後年先生について学ぶようになろうなどは、夢にも想わなかった。大正十四年ふとしたことで京都大学の学生となって、はじめて御講義をきくことになった。一回生のときから普通講義（日本文語史）、講読（とりかへばや物語）は当然として、普通講義を経なければ受験資格のない特殊講義まで、欲ばって聴講した。普通講義は二時間続き、特殊講義は一時間であるが、ノートの分量は大差がなかった。御講義は、次はどうなるのだろうと、興味をもって待たれたが、先生のお宅にまかり出ることには、こわくてできなかった。

私が先生のお宅にお邪魔したのは、学生時代は、卒業論文の題目の件で二度ほどあっただけだと思う。卒業の時、成城高等学校

へ推薦していたゞいた。そうして国語史概説の立案を命ぜられた。

私は先生の発表された論文を、また御講義を中心にして、初稿をつくり、成城高校の文科の文法の授業にそれを使ったと思う。それから、形を改めて再稿をつくり、先生に御覧に入れたら、隅から隅まで手をお入れになって返された。あまり変更の多い所は新しく清書してお返ししたのを、さらに検討されて活字に附されたのが、立命館大学出版部から出た国語史概説である。先生のお手のはいった原稿は、今も私のところにしまつてあるはずである。

昭和六年から京都に住むようになって、先生に直接御厄介になる機会もすつと多くなった。先生をおたずねする時は私はいいたい文法関係のことを話題にした。少しお疲れになっているかと思える時でも、そう

いう話になると、急に活気を帯びて来られる先生であった。私は歌ができないので、先生の主宰しておられたハ、キギには関係が無かったが、先生もまた、一度も私にはその方のことに關してはお勧めが無かった。

よく卒業生のめんどうを見て下さる先生であった。しかも、それが公平無私、用意周到にお話を進められ、その成否はともかくとして、双方になんら後味のわるいようなことのなかったのは、今から考えてみて、なか／＼できないことであつたと思う。近年おからだの御調子が悪いとうかがつていて、遙かに御心配申し上げていたが、こんなに急にお別れしようとは、全く思いがけなかった。お別れ申し上げて見ると、急に自分の人生そのものに大きなうしろができ、大きな支柱を取りはずされたような感じがする。何かものを書いたりする際にも、どうも、背後で先生が見て下さるような感じ、書いたものが常に先生の御目にとまり、御批判を頂いているような感じであったが、たまらなくさびしいと思う。